

集



俳句フォーラム

2015年4月 第55号



秋から冬へ

田中藤穂

秋バテのアーチの下の煉瓦道
バラは実に母も弟も世に居らず
葦の穂を渡りくる風汐の香す
江戸博へ桜紅葉を踏んで入る
冬日のベンチ猫が隣へ来て座る

巢鴨

浦川哲子

恙なきをまず称えあい初句会
寒に入る鋸形の心電図
寒の水容赦なく浴ぶ撫で仏
人日や撫でるとげぬき地藏尊
褒められてかぶり直して冬帽子

五輪展

平野無石

ハンカチの木の実や白き女神像
海ほおずき買いいし参道初紅葉
五輪展の羽釜なつかし冬に入る
戦災も五輪も遠し廊小春
落葉降る丈六仏の掌

冬紅葉

都築繁子

穂芒や干潟の匂う風の音
江戸博に我が家の歴史石露の花
極月や古き酒屋の升漏斗
お守りの自動販売暮近し
傘寿なる祝い皇居の冬紅葉

新幹線五十年

植木やす子

新幹線の歴史を辿り冬に入る
小春日や夢を運びし流線型
振袖の刺繍の技や冬ぬくし
友想う谷津ばら園の秋深し
野分あと鳥数多舞う谷津干潟

夢

大山夏子

渡り来し鳥の白さや干潟風
便利さに奪われしもの冬桜
冬芽固し猫鎮座する参道に
北風の中日の墓月の墓も無縁
神の留守人みな夢を追い続け

白山句会吟行の一句

十月 谷津ばら園

植木やす子評

渡り来て干潟の杭に翅休め

夏子

谷津ばら園の裏は、すぐ東京湾。磯の香がそれを領けるように漂ってくる。ここは数々の渡り鳥の飛来で有名な谷津干潟の一部。昔の記憶によれば遠浅で行け

ども行けども海水が足首くらいまでしかない海岸だった。校友と浅蜷を取りに行った所でもある。今はすっかり変わり谷津干潟となっている。ばら園から干潟へは入れず、柵越しに渡り来る大小の鳥を、名前も解らず眺めていた。黒くやや小さめの鳥たちは中ほどに固まり、手前の杭には大きい鳥が翅を休めていた。静かな穏やかな一時。光景がよく捕らえられていて、様々に思いが浮かぶ一句である。

都築繁子評

ハンカチの木の実や白い女神像

無石

谷津ばら園の正面には噴水があり、その奥の階段を登ればばらのトンネル。右前方に、薔薇の花に囲まれた台座の上に女神の白い美しいフローラ像が立っている。色とりどりの薔薇を見ながら散策の途中、池の端に直径三〜四センチほどの茶色の丸い木の実がぶらさがっていた。プレートにハンカチの木とある。ハンカチの木の花は見たことがあるが、実は初めてで、暫く眺めていた。木の実と女神の取り合わせに惹かれ、深まりゆく秋を感じる一時であった。



星

江口九星

大根と豆腐が同居鍋の湯気
秋天の塔の高きに鴉二羽
星月夜話が尽きぬ同窓会
青空を急に占めたる柿の朱
穂薄の月を映して動きなし

洞

大山夏子

新松子高々と揺れ風のあと
銀杏散り初めて黄金色の手紙
教会の開かぬ高窓鳥渡る
椎大樹暗さ寒さのこもる洞
玻璃拭きて秋天一步近くなる

我存在

故角南昧波

月天心兎が走る雲の上
葛の葉の奔放自在をうらやまし
浪人の月代伸ばし斬られ役
今年酒そろそろ仕込みの始まるや
すきやきや我存在の大なるや

鴟高音

石川賢吾

鴟高音クレーンの先より暮るる
この世には宿題多し夜半の月
芋煮会偲ぶ人増ゆアルバムに
帰り来て独りの寒さに灯をともす
饒舌と寡黙の二人新酒酌む

冬銀杏

関桂二

畝に敷く新藁の香や葱作り
落鮒や釣り師の影の長きこと
病床の窓残り柿数えおり
稲架木寂ぶ稲のすべてが取り去られ
奔放な枝振り見せし冬銀杏

ベルリンの壁

渡辺節子

天高しベルリンの壁崩れし日
分け入りし薄極めて利尻岳
開拓者啓きし大地秋稔る
鷺群れど軍艦島は無言なり
秋の宴赤いパンプス新調す

高調子

中川のぼる

新世界の曲と旅立つ金秋に
瓢箪のもこりもこもこ新生代
山茶花や寺の垣根の西明かり
空つ風吹けば負けじと高調子
数え日や残しし事の多くあり

鮭

吉宇田麻衣

紙漉いてろうそくゆらり長き夜
言葉無く終わりを告げる散紅葉
高く手に熊手持ちいて朝通勤
鮭一本荷物の重い帰り道
栗茹でてテーブル囲む長い時間

